

滁州西澗

韋 應 物

独ひとりあわれむ 幽ゆう草そうのかん澗へん邊に生しやうずるを  
上うえにこうりのしん深じゆ樹に鳴なくあ有り

春しゆん潮ちやう雨あめをふ帯びてばん晚らい来きやう急きうなり  
野や渡と人ひと無なくふ舟ね自おのらず横よこたわる

【作者】韋 應物（七三七〜804年頃？）、中唐の詩人。現・西安の人。玄宗の三衛郎（近衛兵）として仕えた。安祿山の乱で職を失つてから勉学に努

め、地方官を歴任した。詩風は王維・孟浩然の流れをくみ、柳宗元とあわせて「王孟韋柳おうもういりゆう」と呼ばれている。

【語釈】\*滁州：現・安徽省の滁州市、南京の西北50キロメートルのところにある。 \*幽草：奥深い谷に生える草。 \*澗邊：谷川のほとり。

\*黄鸝：こころいうぐい、日本のうぐいすよりも大形。 \*春潮：春にさしてくる潮、春の増水。 \*晚来：夕暮れになりはじまった。

\*野渡：渡し場。

【通釈】奥深い谷間の草が谷川の辺りに生えているのが愛らしく、茂った木の上にはウグイスがさえずっている。

やがて春になって水かさを増した谷川は、雨の中、夕方から流れが急になってきた。渡し場には人影もなく船だけが横たわっている。

【鑑賞】第一句の「幽草」は、才能があるのに認められない作者自身の、第二句の「黄鸝」は、弁舌にたくみで高い位についている小人のたとえとなる。

そして作者は第三句で、春の増水に混乱した世相を暗示し、第四句に至って、この乱世を救う大人物が現れない嘆きを詠じて結ぶのである。